誓い

森園哲也

窓の外は横殴りの雨が四方八方から唸りを上げて荒れ狂い、窓を叩く。辺りは白く霞み、十メートル先が見えない。強烈な風の音とともに車が揺れる。食品会社で配達の仕事をしている後藤哲生(てつお)は、勤務先内の駐車場に停め置いていた愛車の運転席に座っている。一日の仕事を終えたところだ。

台風は急に予報より速度を上げ進路も変えた。大阪を直撃だ。まだ、午後六時台というのに、九月の夜の訪れはいつもよりさらに早く、外は闇に包まれている。車での帰宅はあきらめた。中古で軽四だが、長期のローンで買い換えたばかりの車に、飛んできたごみ箱や木の枝が当たって、傷がつくのもかなわない。

哲生は、ドアを素早く開けると傘をさして、徒歩五分の地下鉄の駅へと向かった。が、一、二分ですぐに車に舞い戻った。傘が瞬時に破壊されたのだ。傘の骨が風で逆に向き、二本折れ、傘布も切れた。真横から雨を含んだ風が身体に当たった。暴風はすさまじく、車でさえ大きくきしみ、持って行かれそうだった。

ここは危険だ。社屋の倉庫の陰に車をそろそろと移動させた。少しはましになった。この場所で多少なりと風の弱まるのを待つことにしよう。台風は怖い。風も雨も、昔の記憶が蘇る。知らぬ間に手が震えていた。

携帯電話を手にすると哲生は「憩」の電話を鳴らした。「憩」は広島風お好み焼きの店で、今日が最後の営業日となっている。明日から閉店なのだ。店では七歳年上の弘美が、哲生の二十八回目の誕生日を祝おうと、ケーキを用意して待っているはずだった。五、六回ベルを鳴らすが出ない。

急な用ができて外出でもしたのだろうか、三駅ほど離れた所にいる彼女の状況を知りたい。さらに鳴らすも出ない。仕方なく「戻られましたら電話をください」と留守電に吹き込んだ。

車の時計は間もなく七時を指そうとしている。この状態では約束の八時に店に着くことはとても無理そうだ。車の中で彼女からの電話連絡を待つことにした。

「憩」は、二本の鉄道が乗り入れている駅のガード下にある。煉瓦壁のあちこちが剝がれていて、下地が剝き出しだ。築後五十年は経っていそうな建物一階の、小さな店舗の連なる真ん中辺りに、「広島風お好み焼き」の赤提灯が灯っている。

その日は、たまたま会社の同僚と通りかかって腹ごしらえに暖簾をくぐった。まずは麦酒を頼むとまだ若いママが麦酒をグラスについでくれた。それが弘美だった。麦酒をつい

だ後、彼女は自分の両手を頬にあてがって、

「……初めてのお客さんに接客をするの緊張する。お店を開いて何年もたつというのに……。私、五年ほど前まで主婦だったんです」

と笑った。その経歴が意外で、またういういしくもあり、哲生は通うようになったのだ……。

「憩」は弘美が一人で経営している。カウンターだけの店舗で、五、六人も客が入ると満席になる。彼女が広島市内の出身で、子供の頃に、母親にこしらえてもらってよく食べていたので、広島風お好みの作り方は自然に覚えたと言っていた。厨房内の鉄板で焼き、出来上がったお好み焼きを皿に入れてカウンターに出す形式をとっている。

「憩」のお好み焼きは、熱した鉄板に水で溶いた小麦粉を円形に引き、鰹節や、刻んだキャベツ、ネギ、海老など、様々な具をその上に重ねて載せる。載せ終わったら、同じ溶いた粉をまぶすようにふりかけてから、何度か返しながら焼いていく。半焼きになったところで、さらに麺を載せて同様に焼く。

次に鉄板の上に卵を落とし、黄身をつぶし柔らかな卵焼きにしたのち、ほぼ出来上がっているお好み焼きを重ねて返す。仕上げにはソースを塗る。

広島風お好み焼きと関西風とは別物で、関西風は、キャベツや具を小麦粉と混ぜ合わせておいてから、一気に焼く。「憩」のお好み焼きはあっさり風味で麦酒によく合う。

それ以外に、その時々の有り合わせの食材を使った鉄板焼きもリクエストできた。麦酒でお腹が膨れた後は、原価に近い良心的な値段のハイボールも注文できる。

店を気に入った哲生は、週二ペースで通った。同僚がすぐに退社したので、ほぼ一人で通い詰め、もう三年が経つ。

弘美は、肩までの長さの黒髪を後ろで束ねてヘアゴムで留めている。中肉中背の平均的体型で、顔立ちも美人度で言うなら普通だろう。口数が少ないが、たまにボソッと喋ると人への優しさが現れ出る。化粧はほとんどしない。が、口と頬だけには薄く紅をさす。そこは彼女の譲れぬ一線なのだろう。

彼女といると肩肘を張る必要がなくて落ち着けた。

哲生は「憩」に通い始めてから、それまでより少し広めの間取りの木造アパートを「憩」の近くに借りた。「憩」に通いやすいようにという思いからだ。以後、嬉しかったとき哀しかったときに、彼女に話を聞いてもらってきている。

嬉しかったこととしては、一昨年秋の、社内運動会の百メートル走で、三着に入ったことだ。人生初の運動会での入賞だった。

辛かったことといえば、職場でずっと目をかけてもらっていた、五歳年上の先輩が、若くして病気で突然亡くなったこと。寂しくてたまらなかった。

他に、普通トラックの冷蔵車でチルド食品を配送中、一瞬眠気が襲って追突事故を起こしたこともある。幸いにして車体前部のバンパーとその周辺が少しへこんだ程度の事故で、冷却装置の故障で積載商品に異常をきたすなどはなかった。だが、相手の呼んだ警察の事故処理に時間をとられ、結局納入時間を一時間以上遅れてしまい、大事な取引先のスーパーに大きな迷惑をかけてしまった。

到着の十分前には、事故後二度目の電話を携帯から入れた。搬入口に着いた時には、白衣姿のパートの従業員さんたち四、五名が、目を吊り上げて車の着くのを待ち構えていた状態だった。何もいわれなかったが、それが逆に彼には酷く応えた。

……等々、いろいろあったが、そんな時にこそ、仕事を終え「憩」の暖簾をくぐると、弘美ママは傍に寄り添ってくれた。

この三年の間には旅行とドライブにも一度ずつ行っている。

ドライブ中のことだった。赤信号で新車の白色のベンツが隣に停まった。いつの日か、自分もこんな車に乗っているのだろうか。そのためには、他人の成功をねたむのでなく、ただ自分の仕事を頑張るしかない。哲生は自分自身を戒めた。

哲生は隣の車線のベンツに暫しそのまま目線を送っていたが、間もなく、後方ドアの窓越しに、白い小さな掌がひらひら揺れるのに気付いた。

すぐに助手席の弘美の肩を指先でとんとんと叩き知らせた。わずかに車を前に動かした。弘美とともに小さな手の方向を改めて見ると、座席の上に立っている三歳くらいの女の子と目が合った。同じ席の奥には、母親らしき女性が眠っているのかじっと座っている。女の子は、手を振り愛想よく笑った。その可愛らしさに、哲生は大きく手を振った。弘美は慈母のような表情で微笑んでいる。ふと哲生は、弘美との間に女の子ができたらいいのにと思った。

旅行は、哲生を含めた常連客の男三人、弘美ママの計四人で、ツアーのバス旅行を申し込み、九州を一周した。阿蘇山の雄大さにはみんなが驚いた。今では同行者の二人ともが、転勤や故郷に帰るなどして、大阪にいない。だが、楽しかった思い出は深く印象に残っている。

半年ほど前のことだ。

その夜、他に客はおらず、いつものように弘美と二人で呑んでいた。しばらくのち、トイレへ用足しに行った哲男が戻ると、弘美が、店舗に続く三畳間の框に腰かけ、うつむいていた。直後、顔を上げた弘美が「寂しい」、と、哲生に向かってつぶやいた。

以前に、私は離婚経験者なのと、彼女から聞かされていたので、辛かったことを思い出したのだろうと考えた。これまで別れた訳など聞ける由もなく来ている。

「……鍵を、かけて」

息苦しそうなかぼそい声で弘美が言った。
言われたように鍵をかけてから弘美の傍に戻ると、彼女の隣に座った。その後背中を服の上からさすった。間もなく弘美が体を寄せてきた。無我夢中で弘美を抱きしめた直後、二人とも畳の上に転がった。
哲生は、かつての赤線地帯のような場所で体験を済ませている。だが、その時の一度きりだった。行為の間中哲生はこれといって何もできずにいた。全面的に弘美にリードを許した。自分からできたことといえば、彼女の肉厚で柔らかな唇を夢中でむさぼったことくらいだった。
終わった後気まずかった。三十も近いというのに、女友達一人いなかったことを知られてしまった。男として恥ずかしく思った。結婚生活の経験者の彼女にとっては、失望以外の何物でもなかっただろう。慣れるといわぬまでも、なぜもう少し体験を積んでおかなかったのかと悔やまれた。きっと、そのせいだろう、その日以降、二人だけの秘密の時間が訪れることは二度となかった。
弘美は、客商売の割にはマイペースで、今では誰もが持っている携帯電話すら、性に合わないと言って持とうとしない女だった。彼氏ができた時に、デートの待ち合わせ場所等で行き違いになったりしたらどうするのだろうと、余計な心配をした。が、思うだけで言葉に出してはいない。年齢差があるので、彼女に対するちょっとした配慮の意識は普段から心がけている。
店で二人だけの時も弘美はあまり話さない。必要な、最小限の会話をするだけだ。けれども哲生は彼女の横顔を見つめ、店内にそれとなく流れている有線放送の音楽を聴きながら、麦酒やハイボールを黙って呑んでいると、十分満たされた。
そもそも、哲生自体があまりなれなれしくされると、どうせ営業用だろうなどと、すぐに猜疑心を持つ性質だった。そんなことからも弘美とは馬が合うと、哲生は一方的に思ってきている。
このところ哲生は自分でそれと分るほど性格が前向きに変わった。弘美と知り合ってから、定時制の高校に通い始めている。今二年生なので後二年で卒業できる。卒業後には、現在のアルバイト扱いから、配送プラス営業の正社員へ廻ってもらってよいとの内諾を会社から得ている。
閉店の話を聞いたのは、一昨日のことで、三日後には店の営業を終えると言った。田舎の老いの目立つ両親が心配なので、店を引き払って、広島市内の実家近くに住むという。哲生にとっては耳を疑う突然の宣告だった。
凪はなかなか弱くならない。台風が早めに通過して、少しでも嵐が収まることを願った。今日中に弘美と会って、考え直してもらうつもりでいる。彼女が自分の前から急にいなく

なることを、現実として受け止めることができずにいる。
台風情報を聞こうと車のラジオをつけるが、雨風のせいだろうか、雑音が入ってよく聞き取れない。ラジオは消して、次に読みかけの本を手に取った。四、五ページ読み進んだところで疲れを感じた。同時に眠気が襲ってきた。哲生は一昨日からあまり眠れていない。
……微睡の中、遠い日の記憶がよみがえった。

母子三人暮らしの哲生の家は海沿いに在った。集落からはやや離れた場所の、険しい崖下のわずかな平地に家は建っていた。哲生は寄せては返す波の音を聞いて育った。
夏の終わりのことだ。大半が漁師で生計をなす海辺の寒村を、夜中の寝ている時間に大型台風が襲った。
海沿いに伸びる幅二メートル程の小径を乗り越えた巨大な高波が、古い木造家屋の我が家を飲み込んだ。渦を巻く海流があっという間に家全体を取り囲んだ。母と、出産時の脳性障害で少し足の不自由な五歳の妹を家の中に残したまま、小学校四年生の哲生だけが、「哲ー、早く、逃げてー」という母の叫び声を背に受けて、寸前で脱出出来ていた。村役場に勤めていた父は一年前に交通事故で亡くなっている。
一階の自分の部屋の窓から外の様子を覗いていた哲生は、二階へと階段を駆け上がり、闇夜の中、窓から雨樋を伝って屋根の上に上った。直後、家の裏手のすぐ傍を通る道路の法面の崖に生えている雑木目指して飛び移り、急傾斜の法面を岩や雑草をつかみながら這い上った。途中で止まって後ろを振り見ると、徐々に流されていく自宅の屋根が街灯の薄明かりに照らされていた。滑らぬよう足もとに気を付けながら、さらに、慎重に時間をかけて、二十メートルの高さの崖をよじ登った。
避難した隣町へ通じる道路上に立つと、風雨が横から叩きつけてくる中、哲生はずぶ濡れになりながら、母と妹の名を、海に向かって何度も何度も声の限り叫び、呼んだ。
「かーちゃん、よしこー」
もう二度と会えないと子供心にも分っていた。それでも涙を拭いながら母と妹の名を呼び続けた。
十分ほど経った頃か、「哲くーん」と、近所の酒屋のおじさんの呼ぶ声が聞こえた。合羽を着て近づいたおじさんに「ここだったのか。心配した」と抱きしめられた。父に言われて、お酒をつけで買いに行っていたので、おじさんのことはよく知っていた。おじさんは呻くように泣いていた。
翌日早朝、海岸の岩場に打ち上げられた家の残骸の中で、母と妹が見つかった。二人は抱き合ったまま亡くなっていたと、消防の人から聞かされた。
哲生は頼る者の一人としていない天涯孤独の身となった。初めて顔を合わせる遠縁の親

戚と、酒屋のおじさんが葬儀を取り仕切ってくれた。葬儀の後、酒屋のおじさん夫婦から、自分たちには子供がいないので、養子としてうちの子になってほしいと言われた。だが突然のことであり、「僕の父ちゃんと、母ちゃんは、世界中にたった一人しかいないわい」と、哲生は、泣きながら言って、受け入れなかった。

哲生はその後児童養護施設で暮らした。中学を出るまで施設にいた。施設にいる間中、台風の日に自分一人だけが先に逃げてしまった。本当は妹を助けられたのではなかったかと、自分を責め続けた。妹は、自分のいくところへはどこまでもついてきたがった子だった。みんなで一緒に生きたかった、と、いつまでも悔やまれた。哲生は施設の他の入所者に対して、自分から打ち解けようとしなかった。同級生と比べ哲生はかなりの小柄で、施設にいる間は同年代からよくいじめられた。

中学を出てからは、隣町の町工場の鉄工所で溶接工として働いた。だが、数年後鉄工所は倒産した。いつしか都会に出て働くようになっていた。

携帯が鳴った。弘美からだった。

〈もしもし、今日の誕生会、この風雨じゃ無理そう……。お祝い、できそうにないね〉

「留守電聞いてくれたんだ。電話くれてありがとう」

〈うん。……私、雨がひどいから、ビニール合羽を着こんで玄関前の溝のごみとか、片付けてたの〉

「そっちに行けたら、そんなこと僕がするんだけど。風がきつすぎて、今移動が無理なんだ。行けるかどうか思案中の状態だよ。ごめん」

〈謝るのは私のほうよ。突然、お店閉めることにしたんだもん〉

本来、誕生会で顔を合わせた時に気持ちを打ち明けるつもりでいたが、このまま会えなくなる不安に頭の中が完全に支配されており、この場で大事な話を切り出すことにした。

「このまま少し話していい。それともかけ直そうか」

緊張気味に言った。

〈構わないわ、話して〉

哲生は、深呼吸をしてから話し始めた。

「……俺、すごいショックで……。何とか、今のお店続けていけないのかなーって、それぱっかり思ってる。そりゃー、親御さんのことは心配だけど……。でも、ご両親は、お兄さん夫婦と同居しているって、以前聞いてたような気もしてるし……。……店閉めたら、もう二度と会えないってことだよね。楽しかった思い出も……いろいろあるんだし」

つかえながらやっと言った。一方で、いままでおいしいものをありがとうと言って、素直に送り出すべきなのではないかという気持ちも、心中のどこかにかすかにあるにはあっ

た。

数秒の間があって弘美の小さい声が聞こえた。

〈……お店閉める理由って、実はいろいろあるの。正直いうと、今の生活に疲れたのかもしれない。お店だって、この先将来性があるとは思ってないし……。表で誰かが私の名を呼んだわ。入り口のほうから声がしたのっ、いったん切って、かけ……〉

話の途中で電話が切れた。台風の安否確認の電話が集中して、つながりにくくなっているのだろうか。あるいは、彼女は、これ以上の、自分との話を嫌っていて、自分の意志として、電話を切ったのではないだろうか……。

彼女の店は一階なので、この台風で大変なのは分る。哲生は、ともかくここは弘美からの電話を再度待つことにした。

もし電話がかからなかったとしたら……。時間が過ぎるのが遅い。被害妄想に陥りでもしたかのように、不安がまた次々とこみ上げた。気づけば哲生は、左右の頬をさすったり、顎の髭剃り跡をなぞるなどの同じ動作を、無意識のうちに何度も何度も繰り返していた。顔が熱を帯びている。

電話が鳴った。

〈またせてごめん〉

小走りで戻ったのか、荒い息遣いをしている。今度はこちらからかけ直した。通話料金で負担をかけるのが嫌だった。

「……どうだった。雨水あふれてなかった?」

〈うん。玄関のすぐ近くまで迫ってたけどまだ大丈夫。それもだけど、隣の店のおばさんに、『今日はもう店閉めてシャッター下ろしなさい。ウチはもう閉めたから、あんたとこだけだよ、灯り点けてるの』って言われちゃった。で、あたし、心配してくれてありがとう。でも、私、今日がお誕生日の人を待っているんですって話したの〉

そこまで一気に言うと、弘美は哲生の続きの話を待つかのように黙った。

「ごめん、大事に思ってくれて感謝している。で、……聞いてほしい。俺といっしょになってほしい。どこへも行かないでほしい。俺と結婚してほしいんだ」

息せきながら言った。この場で電話で話すつもりはなかった。一番いい機会をとらえて言おうと胸の内で思っていた言葉だった。だが、彼女は、目の前から消えようとしている。哲生は居てもたってもいられなかった。

〈……〉

弘美は無言のまま何も話さない。沈黙が続いた。そのうち、鼻をすすりながら話す声が聞こえてきた。

〈無理なの、……嬉しくても、……哲君とは一緒に暮らせないの〉

「なんで、……分かんないよ。突然もう二度と会えないなんて言われても、俺、納得できない。耐えられないよ」

哲生は弱弱しい声で言った。

また沈黙が流れた。十数秒の長い沈黙の後、弘美が話し始めた。

〈……哲君。あなたには、私なんかじゃなくて、年齢の若い健康な素敵な女性と結婚してほしいの。あなたのご両親に喜んでもらえるような人と結婚してほしいの〉

「素敵な若い女性って。どういうこと。俺にとって弘美さんは素晴らしい女性だよ。そう思ってるから言ってるんだよ」

〈ねー、私たち、今まで、お互いに自分のことをあんまり話さなかったわね。初めて知り合った頃、何度か一緒に来ていたあなたのお友達がいたでしょう。その人から哲君のことで聞かされていたことがあるの。『あいつは、孤児で施設育ちなんだ。淋しがり屋だから優しくしてやって』って〉

言った後、弘美は大きく息をした。

「そう、僕が一度も口に出さなかったこと……知ってたんだ。そういえばあいつ、しばらくして会社辞める時に、『お前のことを彼女に頼んであるから』とか言ってたな……。今まで言わなかったのは、同情を受けるのが嫌だった。それだけのことなんだけどさ」

哲生は「ふっ」と自嘲的に息を吐いた。

弘美がさらに言った。

〈あなたは、自分のことを分っているの。あなたは若いのよ。これから先の将来があるの。わたしは一度離婚をしている。……別れた理由を話すわ。六年前、私、妊娠したことがあった。その時の検査で子宮の病気が見つかったの。手術することになった。赤ちゃんをあきらめることになったの。もう二度と子供を産めない体になるとも言われた。それ以来、夫がだんだんよそよそしくなって……。結局、赤ちゃんのことが原因で、その後一年余りで離婚することになったの〉

「……辛いことを思いださせてしまった」

〈だから、あなたには子供を産める人と結婚してほしい。あなたは自分の子供を、亡くなったご両親のお墓の前に連れてって、孫だよって言ってあげなきゃだめな人なの。私だって、あなたが好き。だから、一緒に暮らせるものならば暮らしたい……。あなたといるとき、心を許せてるって、いつも思っていた……けど〉

声を詰まらせて話す弘美の声が途切れた。同時に電話が切れた。

哲生は胸の奥底を激しく揺さぶられていた。彼女を愛している。だが、これまで、子供を囲んだ家族の団欒にあこがれ心を抱いて生きてきている。小学校に入学したばかりの自分の娘が、運動会でグランドを一生懸命駆けている、応援する父である自分……、それが

哲生の夢見ていた家族の光景だ。それは確かなことだった。
どうすればいいのだろうと哲生は、心の中で、幾度も繰り返した。
自分は子供の頃から頑固だった。施設に向かうとき、酒屋のおじさんが、少し酔ったような顔で見送りに来てくれていた。彼は手を握って、「頑張れ」と一言言うとすぐにその場を離れた。だが、しばらくして車が走り出した時、後方を振り向くと、おじさんは何かを叫びながら追いかけてきていた——。
何も分からなかった。分かっていなかった。意固地なバカな子供めっ。今なら分る、酒屋夫婦の、彼らの寂しさが。弘美の孤独が今は分る。
風はわずかに弱まっている。
哲生はもう一人の自分の声をハッキリと聞いた。
「今すぐ会いに行け。行くんだ」
哲生はエンジンをかけ車をそろそろと動かし始めた。道路のあちこちが冠水している。水のせいで車が停まるかと思ったが、動いた。信号機も強風のせいで斜めを向いている。他に動いている車はない。街路樹は風に押され、今にも倒れそうだ。
店の明かりが見えた。急いで車のホーンを鳴らした。弘美が玄関から出てきた。哲生も車から飛び出て弘美の肩を抱いた。互いの額を合わせ、ただ泣いた。